山内 隆「巡礼。そらより」 ギャラリー広田美術 2022 年 3 月 16 日（水）～26 日（土）

【巡礼。そらより】① ②

埼玉は南西部に広がる秩父山地。標高 1102m に鎮座する三峯神社からは広大な関東平野(武蔵國)を眺めることができる。江戸時代中期、村人は講中という信仰組織をたて、三峯神社の御神犬のお札を貰うため、代表者をたて遠隔地に参詣するという代参講の形式を取ってきた。聖地巡礼ともいえるロングトレイルが各集落から三峯神社に向けて行われてきたわけである。

さて想像してみよう。ひかりよりも早いのぞみ、つまり想いが瞬間移動するダイナミズムを。講の成就を受け入れた御神犬は乗り物をまとったような出立ちで「お札」へと姿を変え、瞬時に各村落の講中へ飛来し、御加護という名のネットワークを結ぶ。雲をみおろすような高地にある三峯神社は当時 宇宙空間にそば近い場所だった。純度の高い精神性を移送する場とは、そらに近い場所なのである。

【マリア観音 / 西阿室教会 / 加計呂麻島】③ ⑥

奄美大島の西にある加計呂麻島、島内に西安室教会というカトリック教会、そこに安置されている観音像がひとつ・・。戦後、島内にある観音像が島の占者の娘の夢に現れ、「マリアぞよ」とのたまったとのお告げがあり、その集落をカトリック布教の土地としたところ信者が爆発的に増え、その観音像は西安室教会のシンボルとなったとある。

私は観音像をひと目見ようと加計呂麻島を訪ねてみたが、宿の予約の日時を間違え路頭に迷うことに、しかし諸々の偶然から西安室教会に泊らせてもらうことになった。一晩「お告げのマリア観音像」と過ごすことになったのだが、この歳でお告げなど聞きたくもない。伝奇への畏敬からなかなか眠りに落ちることはできなかったが、明け方五時頃に信者さんの歌う賛美歌の声で目が覚めた。

【稲荷（阿形、吽形）/ 川尻八幡宮 / 相模原】④ ⑤

コロナ禍に突入以来、時間ができてはひたすら地元を散策することとなった。川尻八幡は地元の神社だが、寄ってみるとそこによい顔をしたお稲荷さんがいた。

背景にオーバーラップしている花の紋様は台湾の嘉義で見たマジョリカタイルのデザインが元になっている。マジョリカタイルは戦前イギリスで作られたものを日本が取り入れ量産化し、統治していた当時の台湾にも多く輸出された。日本の戦前の建築のほとんどは取り壊され、マジョリカタイルを確認できる建築物はわずかに残るのみだが、台湾の古い建物にはまだ残留しているとのことで、嘉義では伝統家屋の解体の際に現場から回収したタイルを博物館で保護する運動が進んでいた。もともとドローイングは「島国」というテーマの制作で、日英台を流転した文化についてのラフなものだったが、ある時そこに稲荷を描き込んでみた。

【稚鮎の甘露煮 / やつぼ / 相模原】⑦

相模原川の崖にある小さな湧水池のいくつかを「やつぼ」と呼んでいる。そこを聖地にみたて、勤め先の大学から学生と 10 数 km の巡礼を模擬した。目指す場所近くに鮎料理屋があり夕飯をとった。なかなかおいしかったので、翌年も問い合わせたところ「うちは廃業したんだよ」と言われた。

【ホワイトクリフ / ドーバーポート / 英国】⑨

絶壁のホワイトクリフ / 右脇にドーバー海峡 / 薄暮から日が暮れるまで / ボンヤリと歩く / 眼下の明るい光の中 / 自動車や貨物車 / 延々と曲がりくねった道路を動き回っている / これがドーバーポートか / この光は / 対岸のフランスから渡ってきたのか / これから渡るのか / せわしく動く光 / 夕飯 / 親日家のイタリアン / 一番まずいパスタを食べた